

歴史的人物と市井の人々の伝記を通じた 歴史学の考察

石川 華子

Reflecting on Historiography:

An Analysis of Biographies on Winston Churchill and Ordinary People

Hanako ISHIKAWA

要 旨

史学研究において、伝記はしばしば軽視されてきた。本稿はまず史学研究における伝記の意義を考えるため、伝記に関する歴史学者の見解をまとめ、伝記が学術的価値を持つための要件を分析する。その後、マクロヒストリー、マイクロヒストリーに分類される2種類の伝記に関し、前者はウィンストン・チャーチルの伝記、後者は彼と同時代を生きた市井の人々の伝記を用い、具体的に伝記が学問に与える影響を論証する。本稿は、伝記は過去の社会を包括的に描く媒体であり、社会の中の多くの要素のつながりを示すことができることを明らかにし、その価値は特定の学術領域の範疇を越えることにあることを示唆する。

キーワード：ウィンストン・チャーチル、伝記、史学研究、マクロヒストリー、マイクロヒストリー

1. はじめに

伝記は歴史学の範疇であろうか。伝記は歴史学、文学、心理学のどれにも分類されうる上、伝記を書く主体も歴史学者、作家、ジャーナリストと多様である。本稿は、チャーチルとその同時代に生きた市井の人々の伝記を題材として、伝記の歴史学における重要性について論じる。

2. 史学研究における伝記の立ち位置

まず初めに、伝記が歴史学において軽視されてきた要因、伝記とその他の歴史学者によるアウトプットの違いについて考える。歴史学者による学術的伝記は客観性、1次資料の適切な使用、歴史的意義が必要とされる。Collingwoodは、「伝記は歴史学の範疇

になく、伝記が読者に人気をもつ理由はゴシップ的な価値と歴史的な価値を読者が混同しているからである」と述べている⁽¹⁾。この見解は、歴史学者が伝記に対しても典型的な意見であろう。このように、歴史学者はその価値、目的、手法、客観性の観点から、伝記に懐疑的な姿勢を示してきた。

伝記は他の史学研究と同様に、歴史学者による選択と解釈を要する。しかし Tosh によると、伝記は他の史学研究に比べ、事実を歪めるリスクをより多く孕んでいる。なぜなら歴史学者が対象者の動機を想像する必要があるからである⁽²⁾。対象者が人間である限り、伝記の書き手が客観的態度を取ることは難しい。Lepore は、書き手は対象者を研究しているのではなく、ストーキングしているのだと述べている⁽³⁾。伝記を書くためには対象者に対する書き手の思いと情熱が必要であるが、これらは資料の恣意的解釈につながりかねない。特定の人物への興味と研究に割いた時間の分だけ、書き手は客観性を失いがちである。

客観性はまた相対主義によって脅かされることがある。現代の懸念や歴史主義が研究対象者のキャラクター描写に反映されることから、伝記は書き手自身のキャラクターとバックグラウンドから切り離すことが困難である。Lytton Strachey は *Eminent Victorians* の中で、伝記は2人の人物の人生を示すと述べている。1人は歴史上の人物、1人は書き手である。

伝記という手段を通し、私はビクトリア時代の視点を現代の目に示そうと試みた。場当たり的な視点とも言えるが、私はある理論やシステムを構築したいという願いにしたがい伝記の対象者を選択しているのではなく、単純な便宜上の動機で決定している。説明するのではなく、図示することが私の目的である⁽⁴⁾。

Strachey は、伝記における書き手の主観的な解釈を認めている。伝記の対象者は書き手の分身であり、歴史上の人物の行動は書き手の信念を示している。歴史学者の解釈も社会的、歴史的環境から逃れることはできない。

1次資料も伝記がその価値について疑問を呈されてきた要因の1つである。個人のプライベートな生活やパーソナリティに迫るため、書き手は私的な文書などの資料を使用する必要がある。対象者が20世紀の人物である場合は、家族が資料を所持していることが多く、資料の使用契約を結ぶことで伝記の内容が制約を受ける可能性がある。さらに、このような契約は資料の一部を省略することを求めることが多い⁽⁵⁾。日記や手紙を資料として使うことにも注意が必要である。伝記はある人物の人生について記すものであり、鮮明なストーリーを語るためには同時代人の記憶に頼ることがある。記憶は伝説を作るものである⁽⁶⁾。日記⁽⁷⁾や自伝は1次資料となるが、本当に起きたことをその時記

載しているのではなく、後にストーリーを再構築したものである。したがって、当事者の執筆時の懸念に影響を受けた解釈がとられる。Evansは「記憶は理想化や悪魔化を行うが、歴史はどちらもしてはいけない」と主張する。記憶は現在の道徳に影響を受けるものであり、道徳は歴史的眞実と交わらないものである。記憶は歴史上の事実ではなく、ある種のプロパガンダであるが、歴史は事実に関するものである⁽⁸⁾。物語を構築するため、対象者をさまざまな視点で理解するために記憶は伝記に必要ではあるものの、書き手は他の資料を用いることで記憶の再道徳化のギャップを埋める作業を行わなければならないのである。

このように、客観性や資料に関する脆弱性により、伝記は伝統的には歴史学の範疇として考えられてこなかった。しかしながら、これらの脆さは他の史学研究にも当てはまることであろう。歴史学者の解釈は史学研究に必要であり、常に歴史主義の自覚を要する。どのような研究であっても資料は慎重に取り扱われるべきである。客観性と資料に関しては、伝記は他の史学研究と差はない。歴史学者は客観性を得るため自身の傾向を自覚し、資料を慎重に分析する⁽⁹⁾。伝記が大きく異なる点は、歴史的意味にある。個人の日常生活について研究することは、歴史学において何か意味があるのか。この問いが歴史学者に投げかけられている。

Claude Lévi-Straussによると、伝記はより大きな文脈にはめ込まれた場合に意味を持つようになる。

伝記や逸話の歴史は、低出力の歴史であり、それ単体では明瞭ではない。高出力の歴史に取り込まれた時のみ明瞭になる。伝記や逸話の歴史は説明的ではないが、個人のキャラクターや動機、言動などに関する豊富な情報源である。これらの情報は体系化され、バックグラウンドにおかれ、より大きな権力の歴史に引き渡される⁽¹⁰⁾。

このように、歴史学者の仕事は個人の人生をより大きな文脈にはめ込むことである。そうでなければ、伝記は「弱い歴史」であり、意味のないものである⁽¹¹⁾。Lévi-Straussの主張は文化人類学者のものであり、歴史上の一般大衆の考えに光を当て、その時代のメンタリティを希求するものである。彼の主張は社会史に関するものであるが、これは政治史にも適用される。

E. H. Carrが*What is History?*で述べたように、伝記は伝統的に偉大な人物のものであり、歴史における個人の役割を強調しすぎる傾向、複雑なイベントを単純化しすぎる傾向がある⁽¹²⁾。偉大な人物に関する研究は伝記の1つのモデルであり、政治的伝記に分類される、いわばマクロヒストリカルな伝記である。一方、20世紀には一般人の

伝記の重要性も、「全体史 (holistic history)」の観点から認められた⁽¹³⁾。これは伝記の新たなモデルであり、社会や文学界における個人の位置付けに関するマイクロヒストリカルな伝記である⁽¹⁴⁾。伝統的な歴史が個人の一生に限定される一方で、新たな歴史は自然な期間に着目する⁽¹⁵⁾。この期間の中で、伝記は歴史のさまざまな分野とアプローチを克服することができるのである⁽¹⁶⁾。伝統的な伝記は歴史上の政治的、経済的イベントに関わる個人の動機や思想を理解するため重要であり、新たな伝記は特定の期間に特定のコミュニティで共有されたライフスタイル、信仰、価値観、メンタリティを表象する手段として有用である。そこで、本稿ではウィンストン・チャーチルの伝記を伝統的な伝記の例として、ドイツの若者たちの伝記を新たな伝記の例として用いながら、学術的な歴史学における伝記の2つのモデルについてその価値を考察していく。

3. マクロヒストリーの伝記の意義

チャーチルの伝記は「偉大な人物の歴史」である。政治的文脈では、伝記は歴史上の政治的、経済的な問題に回答するために使用されなければならない⁽¹⁷⁾。個人の生活に焦点を当てることには、歪曲の危険性がつきまとうが、個人の政治的見解と個人が関わった歴史上のイベントを解釈するために重要となる。個人のパーソナリティと動機は政治を形作ることがある。特にヒトラーやスターリンのように、権力が個人に集中する場合はなおさらである⁽¹⁸⁾。個人のパーソナリティを明らかにするためには私生活について研究する必要がある、公的な領域と私的な領域をつなげるためには精神分析も必要となる。精神分析は政治的伝記において新たなアプローチである。Kershaw は、伝記はマルクス主義、文化人類学、社会学に影響を受けるという。新たな歴史は非個人的要素を強調し、個人の役割は「構造 (structure)」に取って代わられる⁽¹⁹⁾。この意味で、伝記の重要性はより広い歴史的理解を与えることである⁽²⁰⁾。ここでは、チャーチルの子供時代が彼の思想的成長と政治にどのように影響を与えたかを分析してみよう。

チャーチルの伝記は歴史学者、作家など多様な職種の人物が出版している。彼の初めての伝記は1905年に Alexander MacCallum Scott が出版した *Winston Spencer Churchill* である。チャーチルの人生を描くことは、資料と伝説との闘いである。彼は伝記、パンフレット、著書、演説、手紙など数えきれない資料を残しており、彼の同時代人も彼に関する回顧録を多数執筆している。チャーチルの伝記も例にもれず、社会、政治、経済など「より強い物語 (stronger narrative)」への架け橋がないことが多い。伝記は資料を使って英雄を作るものであり、その過程で個人の人生を構築するが、偉大な人物の伝記は個人を理想化するのみで終わってしまう事例が多い。前述のように Collingwood と Tosh が批判したのは、偉大な人物の伝記であり、Jordanova が「全

体史 (holistic history)』と呼んだマイクロヒストリーの伝記ではない。

チャーチルの伝記として最も有名なのは、「公式伝記 (Official biography)」であり、チャーチル本人が公認した伝記である。1962年、チャーチルは息子であるランドルフ・チャーチル (1911-1968) に自分の伝記を書くことを依頼した。公式伝記の目的は彼自身の見解を提示することであった⁽²¹⁾。そのため、公式伝記はチャーチル本人が人々に見せたかった彼の側面を記述したものである。ランドルフは歴史学者を募り、若き Martin Gilbert (1936-2015) が一員として選ばれた。彼はランドルフが第2巻まで執筆することを支援し、ランドルフの死後は残りの6巻の執筆を担当した。

第1巻と第2巻は「弱い歴史」の好例である。ランドルフは学校の記録や手紙など、多くの資料を挿入したが、それらの資料が彼の後の人生にどのような影響を与えたかを考察していない。1次資料をまとめてコメントを加えることしかしていないのである⁽²²⁾。したがって、第1巻と第2巻は資料としての価値はあるが解釈に乏しく、私生活が政治に与えた影響について考察していない。これらの伝記は、まだ公文書が公開されていない時代に、研究者が一部の1次資料にアクセスすることを可能にしたことにのみ価値があった。

しかし政治史の観点では、伝記はより大きな政治的文脈に合流しなければならない。彼の身長が5フィート6.7インチであるという事実は、彼の政治家としてのキャリアに何ら関係がないとも考えられるが、両親からネグレクトを受けたことは政治哲学に影響を与え、バンガロールで自学自習に励んだことは大英帝国への考え方を変えた可能性がある。このようなさまざまな経験がチャーチルの判断を左右し、英国の進む道に影響を与えた可能性を検討することは重要である⁽²³⁾。

公式伝記の第1巻は1874年から1900年のチャーチルの人生を描いており、主に彼や親類の手紙で構成されている。個人の子供時代を研究することは政治思想を解説する中で重要となり得るため、歴史学者は時に精神分析も行わなければならない。公式伝記では、彼の子供時代は後世の彼の業績を彩るための英雄の悲しい過去として描かれている。チャーチルは孤独で両親の愛に飢えた少年とされる。ランドルフはウィンストン・チャーチルが母に送った手紙を挿入し、チャーチルがほとんど返信を受け取らなかったと説明している。ランドルフは、「彼の両親のネグレクトや興味の欠如は、ビクトリア期やエドワード期の基準から判断しても凄まじかった」と主張する⁽²⁴⁾。チャーチル自身は子供時代を思い出し、母のことを「夜の星」と形容していたが⁽²⁵⁾、近しくない家族であったことは事実であろう。母のジェニー・ジェロームは自伝を執筆したが、息子の誕生にすら触れなかった⁽²⁶⁾。これらの材料を用いた公式伝記であるが、ランドルフによる手紙の選択は恣意的であり、母の無関心の強調は英雄の悲しい過去というストーリーを語ってはいるものの、それがどのような意味を持ったか、より大きな枠組みに組み込むこと

をしていない。

「*Churchill: A Life*」の中で、Gilbert はチャーチルと両親との関係に異なる解釈を示している。ビクトリア期やエドワード期の、精神疾患を抱えた父を抱えた家庭としては普通であったというのである。ランドルフ卿は生涯の終わりに心身の健康を害し、息子にその人格や能力を否定するような手紙を送りつけた⁽²⁷⁾。父にひどく嫌われても、チャーチルの父に対する愛情は消えなかった。チャーチルは子供時代を思い出し、両親がいかに彼を愛していたかに気づいていたと述べている⁽²⁸⁾。Gilbert はチャーチルの自伝「*My Early Life*」を元に伝記を組み立てている。自伝は実際に起きたことを記述するのではなく、著者が起きて欲しかったことを記述するものである。チャーチルは父に愛されていたと記しているが、実際は記憶の中で父の美しい記憶を作り上げていただけであろう。彼は父を理想化し、父のスピーチを暗唱していたと記している。両親への愛の渴望が、政治家への道を開いていったのである。

2つの伝記は解釈が異なるものの、両親との距離が遠かったことは同意している。また、資料の選択が恣意的であっても、エビデンスに基づくストーリーであり、歴史上の事実である。しかしながら、歴史学においてはより大きな文脈にはめ込まれない限り、事象は歴史的意味を持たない。

Falk は、両親によるネグレクト、母からの愛への渴望は、政界での権力への野心に影響した可能性があり、英国と米国との「特別な関係」に執着したことも、米国人の母との関係に左右された可能性がある⁽²⁹⁾と主張する。したがって、Falk はチャーチルの子供時代の経験が、後に彼の政治ビジョンに影響を与え、それが国家の方向性にも影響を与えたことを示唆しているのである。この文脈付けは精神分析によって行われている。Freud は幼少時の家族との関係は成人後の人間関係に反映されると主張する⁽³⁰⁾。両親のネグレクトを政治思想の文脈に当てはめると、20世紀の政治の理解を深めることにつながる歴史的意味を獲得することになるのである。

同様に、バンガロールでの自学自習でチャーチルが Macaulay や Gibbon の影響を受けたことは、公式伝記のわずかな一部しか占めていない。チャーチルは Gibbon を読むことで、リベラルな政治観や非宗教的な価値観を築いたと述べている⁽³¹⁾。Quinault はこの時の自学自習が政治思想、大英帝国観に与えた影響は大きいと主張する⁽³²⁾。自学自習のストーリーは政治思想と関連づけられ、後の政策を理解するためのヒントとなる。

ランドルフが両親との関係、バンガロールでの自学自習のストーリーを軽視したことは、「弱い歴史」の好例である。どちらのストーリーも政治的な文脈に当てはめることができるにも関わらず、それをしていない。政治的伝記には、私生活と公的生活をつなげ、政策や事件に対する理解を深めることが必要である。しかし幼少時代や私生活を強

い文脈に当てはめることには注意も必要である。政治家の伝記は行動の動機の解釈や、精神分析の手段を必要とするが、もちろん、個人を研究する上で精神分析のみに頼ってはいけない。David Lloyd George (1863-1945) が女好きだったからといって、彼が卓越した政治家であった事実は変わらない⁽³³⁾。ダーダネルスの後で Herbert Henry Asquith (1852-1928) の心労がチャーチルの罷免の一因となったとしても、それが唯一の理由ではない⁽³⁴⁾。精神分析からくる解釈は歴史を新たな視点から見るヒントとなるが、慎重さが必要である。私生活を公的な領域に持ち込むことは、政治や社会において特定の個人の重要性を示すことである。この文脈で歴史的意味とは、歴史の理解への貢献である。

4. マイクロヒストリーの伝記の意義

次に、マイクロヒストリーの伝記の歴史的意味について考察したい。伝記はマイクロヒストリーの手法を用いることで、個人が所属していたコミュニティの歴史的なパターンを炙りだすことができる。社会史におけるこのアプローチにより、メタナラティブに埋もれがちな市井の人々の生活やメンタリティを描くことが可能になるのである⁽³⁵⁾。

マイクロヒストリーは、マクロヒストリーで無視されてきた市井の人々の歴史と考えられる。Ginzburg はマイクロヒストリーを「実生活の科学 (*science of real life*)」と称する⁽³⁶⁾。これはアナール学派の言う「動かない歴史」とは異なり、家族や職能団体、階級などの小さなコミュニティに属する人々の日々の生活を再構築する⁽³⁷⁾。文化人類学的なアプローチであり、文化人類学的ケーススタディに影響を受けている。これまでマイクロヒストリーを研究する歴史学者は社会を単純化しがちであると批判を受けてきた⁽³⁸⁾。Ginzburg はマイクロヒストリーを擁護し、歴史と歴史的真相との明らかな区分を主張する人々に対して反論している。マイクロヒストリーの目的は個人と社会との関係性を再構築することであり、個人の生活についてエビデンスのギャップを埋める可能性を持つのである⁽³⁹⁾。概して市井の人々に関する資料は限られており、存在したとしても資料は客観的ではなく、読み書きができる階級に属する人物が書いたものである。しかし客観的ではなかったとしても、それらは人々に関する貴重な知識を提供する⁽⁴⁰⁾。マイクロヒストリーの歴史学者は資料を異なる視点から分析してナラティブを再構築し、従来の歴史に新たな視点を与えるのである。

マイクロヒストリーの定義はさまざまであるが、Lepore は「偉大な人物の歴史」も、社会を知ることが目的の場合はマイクロヒストリーに含めている。マイクロヒストリーの特徴はナラティブの性質であり、信仰の根源や大衆文化の力、西洋と非西洋の人々との衝突などメンタリティを引き出す。マイクロヒストリーは個人の特異性を必要とせず、

文化を示す媒体か否かに重点をおく。この意味で、偉大な人物の伝記はマイクロヒストリーにも使われうるのである⁽⁴¹⁾。このため、マイクロヒストリーの歴史学者は個人に対してより客観的になることができるとも言われる⁽⁴²⁾。私生活や内面をより強いナラティブに埋め込むことを通して、歴史学者は特定の時代のあるコミュニティの共通性を見つける。下からの歴史は従来の歴史にも有益であり、主流派の歴史を批判、再定義、強化することに使えるのである⁽⁴³⁾。また、マイクロヒストリーとマクロヒストリーは相互依存関係にあり、過去の社会を包括的に理解するためには市井の人々を学ぶことが必要である。

マイクロヒストリーの好例は、第3帝国におけるドイツ人の若者に関する研究である。ヒトラーの伝記は政治的伝記の範疇であり、ドイツ史におけるナチスの特殊性を強調することに重点が置かれてきた。ワイマール共和国やドイツ帝国からの連続性は無視され、人々はゲッベルスのプロパガンダに操られる大勢の支持者として描かれてきた⁽⁴⁴⁾。しかし体制下の人々を研究することで、ほとんどの人々がしたたかにナチスを支持していたことがわかった⁽⁴⁵⁾。ヒトラーユーゲントのアクティビティを通して、多くの若者は初めて旅行に行くことができた⁽⁴⁶⁾。同時に、ナチスがもたらす利益を楽しみつつ、プロパガンダに染まっていなかったことが明らかにされた。歴史学者たちはナチスに従順であったと考えられていた人々が、実際はナチスを利用した側面を明らかにしたのである。

Peukert は、ヒトラーユーゲントのエリートが、中央政府の提供するレクリエーションを楽しむ一方で、Edelweiss Pirates などの非行集団に加わることで非行少年たちはナチスに反抗していたこと⁽⁴⁷⁾、この団体は共産主義などのイデオロギーにも従属していなかったことを示した⁽⁴⁸⁾。このように、市井の人々の人生を研究することで彼らと社会や政治との関係性が明らかになり、どれほど彼らが無関心であったかが示された。比較的階級の低い人々を研究することで、当時のドイツ人のメンタリティを理解することができるのである。これは、それまでこの時代のドイツ社会は極右と極左間の戦いと解釈しがちであったマクロヒストリーの史観に新たな示唆を与えるものであった。人々の研究は政治史の理解に貢献するとともに、人々の精神的独立を明らかにしている。新たなアプローチは政治という大きな世界と人々の小さな世界の相互依存関係を示し、一般人の生活にナチスが浸透していたという従来の考えに疑問を投げかけたのである。

5. おわりに

以上に見てきたように、1人の人物の私生活はマクロヒストリーとマイクロヒストリーの両方に利用され、両者の橋渡しをすることができる。Eckert は、伝記的アプローチ

は「社会の実態や個人の知識や経験など社会的構成概念として概念化されるため、対象と社会、個人と体制という対立を超える方法である」と主張する⁽⁴⁹⁾。マクロヒストリーとマイクロヒストリーは相互依存的であり、日々の生活は政治・社会・経済的機構の中にある⁽⁵⁰⁾。伝記の歴史的意味は政治史の理解を深めること、社会史の中で一般性を見つけることにある。

伝記は1人の人生の中で歴史学の中の垣根を越えることができ、その時代に人々がどのようにつながっていたかを示すことができる。伝記は過去の人生や社会を包括的に描く媒体であり、社会の中の多くの要素のつながりを明らかにする。伝記は歴史学者にとって正当な研究であり、その価値は特定の学術領域の範疇を越えることにある。チャーチルという偉大な政治家の人生を研究することは、彼自身の歴史的な意義を考察するのみならず、彼の生きた時代のあらゆる側面を、彼の人生を通して学ぶことにもつながるのである。

《注》

- (1) R. G. Collingwood, *The Principle of History and Other Writings in Philosophy of History* (Oxford: Clarendon Press, 1999), p. 73.
- (2) John Tosh, *The Pursuit of History: Aims, Methods & New Directions in the Study of Modern History* (Harlow: Routledge, 1994), p. 78.
- (3) Jill Lepore, "Historians Who Love Too Much: Reflections on Microhistory and Biography," *The Journal of American History*, 88 (2001), p. 134.
- (4) Lytton Strachey, *Eminent Victorians* (London: Penguin, 1948), p. 6.
- (5) Ludmilla Jordanova, *History in Practice* (London: Bloomsbury, 2006), p. 162.
- (6) Martin Gilbert, *In Search of Churchill: a historian's journey* (London: Scarecrow Press, 1994), pp. 231-232.
- (7) 日記はその日に記載することが多いものの、当日の記憶を後に再構築したものである。
- (8) Richard J. Evans, "History, Memory, and the Law: The Historian as Expert Witness," *History and Theory*, 41: 3 (2002), p. 334.
- (9) E. H. Carr, *What is History?* (London: Penguin, 1987), p. 123.
- (10) Claude Lévi-Strauss, *The Savage Mind* (Oxford: Oxford University Press, 1962), p. 261.
- (11) Mott T. Greene, "Writing Scientific Biography," *Journal of the History of Biography*, 40: 4 (2007), p. 728.
- (12) Carr, *op. cit.*, p. 45.
- (13) Jordanova, *op. cit.*, p. 41.
- (14) Barbara Caine, *Biography and history* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010), p. 117.
- (15) R. G. Collingwood, *The Idea of History* (Oxford: Oxford University Press, 1978), p. 364.
- (16) Jordanova, *op. cit.*, p. 41.
- (17) Kenneth O. Morgan, "Writing Political Biography," in *The Troubled Face of Biography*, ed. E. Homberger and J. Charmley (London: Palgrave Macmillan, 1988), p. 33.
- (18) Tosh, *Pursuit of History*, p. 78.

- (19) Ian Kershaw, "Power and Personality," *The Historian*, 83 (2004), pp. 10–12.
- (20) *ibid.*, p. 19.
- (21) Gilbert, *In Search of Churchill*, p. 65.
- (22) Victoria Glendinning, "Lies and Silence," in *The Troubled Face of Biography*, ed. E. Homberger and J. Charmley (London: Palgrave Macmillan, 1988), p. 53.
- (23) Gilbert, *In Search of Churchill*, p. 17.
- (24) Randolph S. Churchill, *Winston S. Churchill vol. 1 Youth 1874–1900* (London: Heinemann, 1966), p. 4.
- (25) Winston Churchill, *My Early Life* (London: Thornton Butterworth, 1930), p. 2.
- (26) Mrs. George Cornwallis-West, *Reminiscence of Lady Randolph Churchill* (New York: The Century co., 1908).
- (27) Martin Gilbert, *Churchill: A Life* (London: Pimlico, 2000), pp. 37–38.
- (28) James, Robert Rhodes, *Lord Randolph Churchill* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1959), p. 258.
- (29) Avner Falk, "Aspects of Political Psychobiography," *Political Psychology*, 6: 4 (1985), p. 617.
- (30) Judith Brett, "The tasks of political biography," in *History on the couch: essays in history and psychoanalysis*, ed. J. Damousi and R. Reynolds (Victoria: Melbourne University Press, 2003), p. 80.
- (31) Roland Quinault, "Winston Churchill and Gibbon," in *Edward Gibbon and Empire*, ed. R. McKitterick (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp. 318–319.
- (32) *ibid.*, p. 328.
- (33) Brett, *op. cit.*, p. 74.
- (34) Gilbert, *In Search of Churchill*, pp. 62–64.
- (35) Caine, *op. cit.*, pp. 23–25.
- (36) Carlo Ginzburg, and Carlo Poni, "The Name and the Game: Unequal Exchange and the Historiographic Marketplace," in *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, ed. E. Muir and G. Ruggiero (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1991), p. 8.
- (37) Edward Muir, "Introduction: Observing Trifles," in *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, ed. E. Muir and G. Ruggiero (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1991), p. xii.
- (38) Naomi R. Lamoreaux, "Rethinking Microhistory: A Comment," *Journal of the Early Republic*, 26: 4 (2006), p. 559.
- (39) Carlo Ginzburg, "Checking the Evidence: The Judge and the Historian," *Critical Inquiry*, 18: 1 (1991), p. 90.
- (40) Carlo Ginzburg, *The Cheese and the Worms: the cosmos of a sixteenth-century miller* (Harmondsworth: Penguin, 1992), p. xv.
- (41) Lepore, *op. cit.*, pp. 132–133.
- (42) *ibid.*, p. 144.
- (43) Andreas Eckart and Adam Jones, "Historical Writing about Everyday Life," *Journal of African Cultural Studies*, 15: 1 (2002), p. 6.
- (44) Detlev Peukert, *Inside Nazi Germany: Conformity, Opposition and Racism in Everyday Life* (London: Yale University Press, 1987), p. 67.
- (45) *ibid.*, p. 76.
- (46) Sebastian Haffner, *The Meaning of Hitler* (London: Scribner, 1979), p. 39.

- (47) Peukert, *op. cit.*, pp. 1570–159.
- (48) Michael H. Kater, *Hitler Youth* (Cambridge: Harvard University Press, 2004), pp. 136–137.
- (49) Eckart, *op. cit.*, p. 9.
- (50) *ibid.*, p. 8; *The Cheese and the Worms* は 16 世紀の農民のメンタリティを見せるだけでなく、宗教改革と活版印刷の発明の影響を示している。活版印刷は Menocchio が本を読むことを可能にし、宗教改革は彼に自分の考えを表明することを可能にした。Ginzburg, *The Cheese and the Worms*, p. xxiv.

参考文献

- Brett, Judith. “The tasks of political biography.” In *History on the couch: essays in history and psychoanalysis*, edited by J. Damousi and R. Reynolds, 73–83. Victoria: Melbourne University Press, 2003.
- Caine, Barbara. *Biography and history*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010.
- Carr, E. H. *What is History?* London: Penguin, 1987.
- Churchill, Randolph. *Winston S. Churchill vol.1 Youth 1874–1900*. London: Heinemann, 1966.
- Churchill, Winston. *My Early Life*. London: Thornton Butterworth, 1930.
- Collingwood, R. G. *The Idea of History*. Oxford: Oxford University Press, 1978.
- Collingwood, R. G. *The Principle of History and Other Writings in Philosophy of History*. Oxford: Clarendon Press, 1999.
- Cornwallis-West, Mrs. George. *Reminiscence of Lady Randolph Churchill*. New York: The Century co., 1908.
- Eckart, Andreas and Adam Jones. “Historical Writing about Everyday Life.” *Journal of African Cultural Studies* 15, no. 1 (2002): 5–16.
- Evans, Richard. “History, Memory, and the Law: The Historian as Expert Witness.” *History and Theory* 41, no. 3 (2002): 326–345.
- Falk, Avner. “Aspects of Political Psychobiography.” *Political Psychology* 6, no. 4 (1985): 605–619.
- Gilbert, Martin. *Churchill: A Life*. London: Pimlico, 2000.
- Gilbert, Martin. *In Search of Churchill: a historian's journey*. London: Scarecrow Press, 1994.
- Ginzburg, Carlo and Carlo Poni. “The Name and the Game: Unequal Exchange and the Historiographic Marketplace.” In *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, edited by E. Muir and G. Ruggiero, 1–10. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1991.
- Ginzburg, Carlo. “Checking the Evidence: The Judge and the Historian.” *Critical Inquiry* 18, no. 1 (1991): 79–92.
- Ginzburg, Carlo. *The Cheese and the Worms: the cosmos of a sixteenth-century miller*. Harmondsworth: Penguin, 1992.
- Glendinning, Victoria. “Lies and Silence.” In *The Troubled Face of Biography*, edited by E. Homberger and J. Charmley, 49–62. London: Palgrave Macmillan, 1988.
- Greene, Mott. “Writing Scientific Biography.” *Journal of the History of biology* 40, no. 4 (2007): 727–759.
- Haffner, Sebastian. *The Meaning of Hitler*. London: Scribner, 1979.
- James, Robert Rhodes. *Lord Randolph Churchill*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1959.
- Jordanova, Ludmilla. *History in Practice*. London: Bloomsbury, 2006.

- Kater, Michael. *Hitler Youth*. Cambridge: Harvard University Press, 2004.
- Kershaw, Ian, "Power and Personality." *The Historian* 83 (2004): 8-19.
- Lamoreaux, Naomi. "Rethinking Microhistory: A Comment." *Journal of the Early Republic* 26, no. 4 (2006): 555-561.
- Lepore, Jill. "Historians who love too much: Reflections on Microhistory and Biography." *Journal of American History* 88 (2001): 129-144.
- Lévi-Strauss, Claude. *The Savage Mind*. Oxford: Oxford University Press, 1962.
- Morgan, Kenneth. "Writing Political Biography." In *The Troubled Face of Biography*, edited by E. Homberger and J. Charmley, 33-48. London: Palgrave Macmillan, 1988.
- Muir, Edward. "Introduction: Observing Trifles." In *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, edited by E. Muir and G. Ruggiero, vii-xxviii. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1991.
- Peukert, Detlev. *Inside Nazi Germany: Conformity, Opposition and Racism in Everyday Life*. London: Yale University Press, 1987.
- Quinault, Roland. "Winston Churchill and Gibbon." In *Edward Gibbon and Empire*, edited by R. McKitterick, 317-332. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Strachey, Lytton. *Eminent Victorians*. London: Penguin, 1948.
- Tosh, John. *The Pursuit of History: Aims, Methods & New Directions in the Study of Modern History*. Harlow: Routledge, 1994.

(原稿受付 2023年5月11日)